

階段

海野十三

青空文庫

出来ることなら、綺麗に抹殺してしまいたい僕の人生だ。それを決行させては呉れない「彼奴」を呪う。「彼奴」は何処から飛んできて僕にたかったものなんだか、又はもともと僕の身体のうちで隠れていたものが、或る拍子に殻を破ってあらわれ出でたものなんだか判然しないのであるが、兎も角も「彼奴」にひきずられ、その淫猥らしい興奮を乗せて、命の続くかぎりは吾と吾が醜骸に鞭をふるわねばならないということは、なんと浅ましいことなのであろう。

嗚呼、いま思い出しても、いまましいのは、「彼奴」が乗りうつったときの其のキツカケだ。あの時、あんなことに乗り出さなかつたなら、今ごろは「キヤナール線の量子論的研究」も纏めることができ、年齒僅か二十八歳の新理学博士になり、新聞や雑誌に眩しいほどの報道をされたことであろうし、それに引続いて、国立科学研究所の部長級にも栄進し、郊外に赤い屋根の洋館も建てられ、大学総長の愛嬢を是非に娶ってもらいたいと

いうことになり、凡ては小学校の修身教科書に出ているとおりの立身栄達の道を、写真にうつしたように正確にすすんで行ったことだろうと思う。たしかに、それまでの僕という人間は修身教科書の結晶のような男で、そうした栄冠を担う資格は充分あるものと他人からも謂われ、自分としても、強い自信をもっていたのであった。何が僕を一朝にして豹変せしめたか、そのキツカケは、大学三年のときに、省線電車「信濃町」駅の階段を守ったという一事件に発する。

僕の大学の理科に変わり種の友江田先生というのがある、と云えばみなさんのうちには、「ウン、あの統計狂の友江田さんか！」と肯かれる方も少くあるまいと思うが、あの統計狂の一党に、僕が臨時参加をしたのが、そもそも悪魔に身を売るキツカケだった。友江田先生の統計趣味は、たとえば銀座の舗道の上に立って、一時間のうちに自分の前をすぎるギンブラ連中の服装を記録し、こいつを分類してギンブラ人種の性質を抽出し大胆な結論を下すことにある。午後五時の銀座にはサラリーメンが八十パーセントを占めるが、午後二時には反対にサラリーメンは十パーセントでその奥さんと見られる女性が六十パーセントもぞろぞろ歩いているなどと言う面白い現象を指摘している。これは昨年度には病気で死んだ人が何千万人あって其の内訳はどうだとか言う紙面の上の統計の様に乾枯ら

びたものではなく、ピチピチ生きている人間を捉えてやる仕事でその観察点も現代人の心臓を突き刺すほどの鋭さがあるところに、わが友江田先生の統計趣味の誇りがあるといつてよい。

で、僕は「省電各駅下車の乗客分類」という可なり大規模の統計が行われるとき、ひとで人手が足らぬから是非に出てほしいということで、とうとう参加する承諾を先生に通じてしまった。やがて部員の配置表が出来て、僕は前にも云つたとおり、比較的閑散な信濃町駅を守ることとなった。

「古屋君、それじゃ御苦労だが、『信濃町』の午後四時から五時までの下車客を、例の規準にしたがつて記録してくれ給え。僕も信濃町を守ることになつてゐるんだ。で僕は男の方を取るから、君は一つ婦人客の方を担任たんにんしてもらいたいんだ」

「先生、男の方は僕がやります。それで先生には……」

「駄目だよ、男の方は全下車客の八十パーセントも占めてゐるんだから、慣れない君には無理だと思ふんだがネ。婦人の方は数も少いうえに種類も少くて、大抵たいてい女事務員とか令嬢奥様といった位のところだから、君で充分つとまると思つてそう決定きめであるんだ。是非、婦人をひきうけて呉れ給えな」

僕は、それでも断るとは言い出せなかつたものの、困つたことになつたと思つたことである。女なんか、ひと眼みるのもけがらわしいと思つている僕が（いや全く其の頃は真剣にそう信じていたのである）一時間に亘つて女ばかりを数えたり分類をするためにジロジロ観察したりするのは実に耐えられないことだつた。それに、この立番はその日から向う一週間に亘つて続けられるというのだから、鳥渡想像してみただけでも心臓が締めつけられるような苦しさに襲われるのであつた。

それは夏も過ぎ、涼しい風が爽かに膚を撫でて行く初秋の午後であつた。僕は肩から胸へ釣つた記録板と、両端をけずつた数本の鉛筆とを武器として学究者らしい威厳を失わないように心懸けつつ、とうとう「信濃町」駅のプラットホームへ進出した。友江田先生の命ずるところに随い、僕はあの幅の広い、見上げるほど高い鼠色の階段の下に立つた。そして乗降の客たちの邪魔にならぬ様、すこし階段の下に沿つて奥へ引こむことにした。其処は三角定規の斜辺についてすこし昇つたようなところで、僕の眼の高さと同じ位のところに、下から数えて五六段目の階段が横からすいてみえていたのであつた。そこに立ち階段を横からすかしてみれば、この階段を上つて出口へ行く乗客の男女別はその下半身から容易に解つたし、観察者たる僕は身体を動かす必要もなく唯鼻の先にあとから

あとへと現われて来る乗客の下半身を一つ二つと数えればよいのであった。いよいよ時間がきたので、反対側に居る先生が、それツと合図をした。僕は緊張に顔を赧あかくしてそれに答えると、その瞬間、鼻先に幼稚園がえりらしい女の子の赤い靴が小さい音をたてて時計の振子のように揺ゆらいで行ったのを「一ツ」と数えて「幼年女生徒」の欄へ棒を一本横にひっぱった。それに続いて黒いストッキングに踵かかとのすこし高い靴をはいた女学生の三人連れが、僕の鼻の前を掠かすめて行つたが、その三人目の女学生がどういう心算つもりだか急に駆け上つたので、パツと埃ほこりがたつて僕の眼の中へとびこんで来た。僕はもうこの非衛生な仕事がいやになつた。

併しかし、この仕事をはじめてから三十分も経つうちに不思議な興味が僕に乗移つた。駅の階段を上つて行く婦人の脚は、だんだんと増えて行つた。黒いストッキングが少なくなり、カシミヤやセルの袴はかまの下から肉づきのよい二三寸の脛はぎをのぞかせて行く職業婦人が多くなつた。

その途端に、金魚のように紅と白との尾おひれを動かした幻影が鼻の先を通りすぎるのが感ぜられた。僕は「袴の無い若い職業婦人」の欄らんへ、一本のブルブル震ふるえた棒を横にひいた。それは脚だけの生きものでしかなかつた。脚だけの生きものが、きゅつと縮しまつた白い足袋

をはき、赤鼻緒あかはなおのすがた軽い桐きりの日和下駄ひよりげたをつっかけている。その生きものを見ていると身体がフラフラする。身体が言うことをきかなくなる。まだ時間が切れないのかな、と思つた。

すると今度は階段の下からまた一人、僕としては最も正視せいしするに耐えない「袴はかまの無い若い職業婦人」が現われた。その欄らんへ一本のブルブル震えた棒を横にひくと、恐こわいもの見たさに似た気持で、その白い脛はざをのぞきこんだ。僕はあんなに魅力のある脛をみたことがない。実にすんなりと伸びた脛はざだった。ふくら脛はむちむちと張りきり、乳房のように揺ゆいでいた。向う脛の尖とがつたふちなどは想像もできないほどまんまるく肉がついていた。その色は牛乳を凍こおらしてみたほどの密度のある白さだった。そのきめの細こまい皮膚は、魚のようにねっとりとした艶つやとピチピチした触しよつかん感かんとを持っていた。その白い脛が階段の一つをのぼる度たびごと毎ごとに、緋色ひいろの長い蹴けだ出しが、遣瀬やるせなく搦からみつくのであった。歌麿うたまろからずっと後あとになつて江戸浮世絵の最も官能的描写に成功したあの一勇齋いちゆうさい國芳くによしの画いたアブナ絵が眼の前に生命を持つて出現したかのような情景だった。その白い脛が階段を四五段のぼると、どうしたものか丁度ちやうど僕の鼻の先一尺というところで突然、のぼりかけたままピタリと階段の上に停とつてしまったものだから僕は呼吸いきのつまるほど驚いた。僕の五感ごかんは針の

ように鋭敏になつて一瞬のうちにありとあらゆるところを吸取紙すいとりがみのように吸いとつてしまつた。

ふくら脛のすこし上のところに、まだ一度も陽の光に当たつたことがないようなむつつり白い肉塊にくかいがあつて、象牙ぞうげに彫りきぎんだような可愛い筋が二三本匍はつていた。だがその上を一寸ばかりあがつた膝ひざ頭がしらの裏側をすこし内股の方へ廻つたと思われるところに、紫とも藍あいともつかない記号のようなものがチラリと見えたのは何であろう。見極みきわめようとした途端とたんに、ひとでのような彼女の五本の指が降りて来て僕の視線の侵入するのを妨げてしまつた。僕は何故か階段に踏み止とどまつた婦人の心を読むために、はじめて眼をあげて彼女の顔を見あげた。おお、これは又、なんとという麗あでびと人ひとであろう。花心かしんのような唇、豊かな頬、かすかに上気した眼のふち、そのパツチリしたうるおいのある彼女の両まなこの眼は、階段のはるか下の方に向いていて動かない。その眼めには、なにか激しい感情を語っている光がある。で、私は彼女の眸ひとみについてその行方ゆくえを探つてみた。だがそこには長身の友江田先生の外になにもも見当らなかつた。僕はしばらく尚なほも遠方へ眼をやつたが矢張り何者もうつらなかつた。そのときハツと或ることに氣付いて友江田先生の顔を注目したのであるが、「もう時間だ。やめよう」

と先生が俄かにこつちを見て叫んだ。その声音が思いなしか、異様にひきつったように響いたことを、それから後、幾度となく僕は思い出さねばならなかったのだ。気がついて僕は階段を仰ぐと、あの女の姿は、消えてしまったかのように其処に無かった。僕はその場に崩れるようにへたばった。

其の夜、下宿にかえった僕が、悔恨と魅惑との間に懊惱の一夜をあかしたことは言うまでもない。翌日はたとえ先生との約束でも今日は行くまいと思つたが、午後になると物に憑かれたように立上ると制服に身を固めて、いつの間にやら昨日と同じく、「信濃町」駅のプラットホームに記録板を持つて立つていた。その日も怪しい幻の影を、昨日にも増して追つたのであつた。時間の果てんとする頃、前の日に見覚えた若い婦人が、階段を上つて行くのを認めたが、この日は別に階段の途中に立ちどまることもなしに、唯一般乗降客にくらべて幾分ゆつくりと上つて行くことには気付いたのである。そのために僕は、その若い婦人の脛をほんの浅く窺つたに過ぎなかつた。友江田先生の顔色も窺つたが、気にはなりながらもそちらへ費す時間はなかつた。その翌日も又次の日も僕の身体の中には、「彼奴」が生長して行つた。斯くて予定の七日間が過ぎてしまったあとには、僕の身体には飢えた「彼奴」が跳梁することが感ぜられ、それとともに、あの若き婦人の肢体が

網膜もうまくの奥おくに灼やきつけられたようにいつまでも消えなかった。

2

翌年の春、僕は大学を卒業した。卒業に先立って僕達理科得業生とくぎょうせい中の大先輩である芳川よしかわ巖太郎げんたろう博士が所長をしている国立科学研究所から来ないかということであったから、友江田先生の意見を叩いてみた。友江田先生は大学に籍がありながら、同時に研究所にも席がある特別研究員だったから研究所の様子はよく知っている筈はずだった。

「……いいでしょう。君さえよいと思うのならね」と先生はしばらく間あいだを置いて同意して呉くれた。僕は先生が二つ返事で賛成して呉れなかったのを不服に思った。それは勿論、先生の慎重なる一面を物語るものであったと同時に、「信濃町」事件（というほどのことではないかも知れないが）に於おける先生の不審な態度も思い合あわすことを止やめるわけには行かなかった。

四月になると、僕は研究助手として、はじめて国立科学研究所の門をくぐった。この国研は（国立科学研究所を国研と略称することも、其の日知ったのである）東京の北郊飛鳥山の地続きにある閑静な研究所で、四階建ての真四角な鉄骨貼りの煉瓦の建物が五つ六つ押しならんでいるところは、まことに偉観であつた。僕は第二号館にある物理部へ編入せられ九坪ほどの自室と、先輩の四宮理学士と共通に使う三室から成る実験室とを与えられた。そして研究は、国研の範囲と認める自由な事項を選定してよいと謂うことで、四宮理学士と共に、特に所長芳川博士直属の研究班ということになった。四宮理学士は、背丈はあまり高くはないが、色の白いせいか大理石の墓碑のように、すつきりした青年理学士で、物静かな半面に多分の神経質がひそんでいるのが一目で看守せられた。僕よりは四歳上の丁度三十歳で、友江田先生よりは矢張り四歳下になっていた。僕は最初の一日を、今日から自分のものになった椅子の上のびのび腰を下し、さて何を研究したものかと考え始めたが、一向に纏りはつかず、考えれば考えるほど、今日の帰り路は、どう取つて、定刻までに信濃町まで出たものかと、そればかりが気になりだした。ところへヒョックリ四宮理学士が姿をあらわして、これから所内を案内するから附いて来給えと言う。僕は喜んで椅子から立ち上つて一緒に廊下へ出た。学術雑誌で名前を知つて

いる偉い博士たちの研究室が、納骨堂のうこつどうの中でもあるかのように同じ形をしてうちならば、白い大理石の小さい名札の上にその研究室名が金文字きんもじで記しるされてあった。最後に豊富な蔵書で有名な図書室とその事務室とを案内してくれることとなった。先まず事務室へ入ると大きい机が一つと小さい机が一つと並んでいる外に和洋のタイプライター台があった。そして四方の壁には硝子戸棚ガラスが立ち並んで、なんだか洋紙のようなものがギツシリ入っていた。大きい机の前には一人の二十五六にも見える婦人が、黒い着物に水色の帯をしめて坐っていたが、四宮理学士が声をかけると共にこちらへ立ち上つて来て、

「わたくしが佐和山佐渡子さわやまさとこでございます」と丸い肩を丁重ていちょうに落して挨拶した。

「理学士佐和山さんです。×大を昨年出られた……」と四宮理学士が註ちゆうを加えた。僕はその名を知っていた。あの天才女理学士が、こんなに若い女性で、しかもこの研究所に居て洋服はおろか袴はかまもつけていない平凡な服装をしているのを発見して驚いてしまった。あとで知ったことだが、佐和山女史は図書係主任を兼任してこの室へやに席があるとのこと、その前の小さな机の一つには一脚の椅子が空からのまま並んでいた。

「ミチ子嬢は何処かへ行きましたか？」と四宮理学士が訊きいた。

「さア、隣りに居ましよう」と女史は指を厚い擦すり硝子ガラスの入った隣室との間の扉ドアを指ゆびさした。

ミチ子嬢といわれる婦人の机の上には、一輪挿しりんげに真赤なチューリップが大きな花を開いて居り、机の横の壁には縫いぐるみの小さいボビーが画鋏がびようでとめてあった。僕はなんとなくこの机の主のことが気懸りきがかになった。

四宮理学士が扉ドアを開いて、となりの図書室を案内してくれた。僕はその室へ一步を踏みこむなり、思わず「ほーッ」と声をあげてしまった。その室は三十坪ばかりの長方形の室であるが、四方の壁という壁には金文字の書籍雑誌が幾段にもぎっしりとつまっていた。広い読書机が二つほどすこし右手によつて置かれ、左手には沢山の小引出を持ったカード函かきなが重つていた。そしてなによりの偉観は室の中央に聳そびえ立つ幅のせまい螺旋階段らせんであった。それはわずかに人一人を通せるほどの狭さで、鉄板を順々に螺旋形にずらし乍らなが、簡単な手すりと、細い支柱で、積み重ねて行ったものだった。思わずその下に立ち寄つて上を見上げてみると、螺旋階段はスクスクと伸びて三階にまで達している。その三階の天井は首の骨が痛くなるほど随分と高かつた。なんとなく、「ジャツクと豆の木」の物語に出て来る天空てんくうの鬼ヶ城おにしまにまでとどく豆蔓まめづるの化物のように思われた。螺旋階段の下には事務室へ通ずる入口の外にも一つ廊下に通ずる入口があった。螺旋階段を四宮理学士と二階へのぼると、ここもおなじような本棚ばかりの四壁しへきと、読書机とがあり、入口はない代り

に、天井が馬鹿に高くつまり二階の天井は元来ないので、三階の天井が二階の天井ともなり、随って三階はバルコニーのようにこの室の上に半分乗り出して、それへ螺旋階段が続いていた。

「三階へも一度上つてみましょう」と四宮理学士が言った。

僕は自ら先登に立つて、冷い螺旋階段の手すりに恐わ恐わ手をさしのべたときだった。急に頭の上にドタンボタンという激しい音がすると共に階段の上からネルソン辞典が四五冊、足許へ転がり落ちて来た。

「あら、あら、あら」

と甘つたるい声が天井から響くと、その急な階段を一人の女性がいと身軽にとぶように下りて来た。

「ミチ子嬢なのだナ！」

僕は思った。初対面の愛敬をうかべて上を仰いだ僕は鼻の先一尺ばかりのところに見われた美しい少女の面を見つめたまま急に顔面を硬直させなければならなかった。

「図書係の京町ミチ子嬢。こちらは今日から入所された理学士古屋恒人君。よろしく頼むよ」四宮理学士の声は朗らかであった。

「あらまあ、あたし初めてお目にかかつてたいへん失礼をいたしました……」と彼女は紹介者に負けず朗らかに謳うたった。僕はなんと挨拶あいさつをしたのか覚えていない。ただ「初めてお目にかかつて」と言ったミチ子嬢ぢやうが、本当に、信濃町でこの半年あまり毎日のように彼女の白い脛すねを追い廻めぐしている僕に気がついていないのであろうかどうかを何時までも気にしていた。

翌日から僕は新しい希望と新しい焦しょうそう燥そうとを持って、自分の研究室へつめかけた。だが、落付いた気持で研究室に坐まっていることは出来なかつた。幸い、早く研究題目を所長の芳川博士へ報告する必要があつたので、その調査に名を借りて、しばしば図書室へ通つた。その室には廊下へやから入れる戸口があつたにも拘かわらず、知らぬ顔をして研究事務室の扉ドアを先ず押し入り、それから又も一つの扉を押し隣りの図書室へ入つた。事務室の扉を開くと、佐和山女史はピリツとも身体を動かさなかつたが、京町ミチ子だけはハツとしたように、私の方へ顔をあげ、それからニツコリと笑つてみせるのであつた。そのたびに私は身体を硬くして、強しいて笑顔を作るのに骨を折つた。

図書室へ入つた僕は、大抵たいてい、螺旋階段をのぼりきつて、三階の書棚の前に立ち、並んでいる雑誌の表題や年号を幾度となくよみかえしたり、その書棚の或る一つに雑然と積み

かさねられてある雑部門の珍書などを手にとつてみていた。最初の考えでは、何時かも見たように、此の三階へまたミチ子がやつて来るかも知れない。すると土蔵の屋根うらのように薄暗くて階段の外には出口すらもないこの室のことだから、案外彼女と静かに話でも出来るのではないかと思つた。だがミチ子は遂に一度もこなかつた。しかし僕は相変らずこの三階にのぼることを止めなかつた、というのはこの黴くさい陰気な室が大変氣に入つてしまつたからである。なんとなく秘密でも隠されているような魅惑が感ぜられた。さうこうする内に、とんでもない事件が図書室の中に起つて、僕はこの三階に居たため恐ろしい嫌疑を蒙らねばならないようなことが出来てしまつた。

僕が国研へ入つて十日程経つた或る日の午後のことであつた。例によつて僕は事務室をのぞき、ミチ子だけが机の前に坐つて手紙らしいものを書いてゐるのを認めた上、図書室の扉を押して入つたが其所には誰も居なかつた。廊下へ通ずる扉が半開きになつてゐるのが鳥渡氣になつた。僕はそのまま螺旋階段を二階へ上つて行くと、其所にはいつものように四宮理学士の坐る読書机の上に、なんだか厚い原書が開かれてあり、当の四宮理学士の姿は見えなかつたが、僕が三階への階段へ一歩足をかけたとき、階段の直ぐ背後に御本人がうづくまつた儘、何か探しものでもしているような姿を認めた。僕は別に声もか

けず三階へのぼって行き例のとおり雑部門の珍籍の一つである十九世紀の犯罪科学に関する英国スコットランド・ヤードの報告をひっぱりだして読みはじめた。

何十分経ったかは知らない。なんだか二階で人の呻吟うめくような声をきいたと思った。するとトントンと二階から一階へ降りて行く人の蹻音あしおとがかすかに聴えてきた。やがてガチヤンと言う硝子扉ガラスビにうち当たったような音がきこえてきたが、そのままひっそりとしてしまった。二階の四宮理学士のしわぶきも聴えて来ない。どうしたものか鳥渡気ちよつとになったので手にしていた本を抛りほうだすと、螺旋階段をすかして二階なり一階なりをすかしてみたが狭い視野のこととて別に異状も見当らない。唯ただ、あまり僕の立っていると、高いので三階から下まで急転落きゆうてんらく下しそうな脅迫観念きようはくかんねんに捉とらわれたので、首を引っこめると、念のために二階へ降りてみた。一見異状はないようであったが、階段のうしろに当る狭い書棚の間から、リノリウムの上に長々と横よこたわっている二本の男の脚を発見したときには、

「やつぱり、先刻さつきやられたんだな」

と思った。恐こわ恐ごわその方に近よってみると、これはたいへん、倒れているのは所長の芳川博士であったではないか。僕は大声をあげて博士を抱き起してみたのであるが、博士

の身体はグツタリと前にのめるばかりで、もう脈搏みやくはくも感じなかった。どうしたのかと仔細しさいに博士の身体を見れば、ネクタイが跳ねあがったようにソフトカラーから飛びだして頸部けいぶにいたいたしく喰い入っている。それは明らかにネクタイによる絞殺こうざつであることがうなずかれた。

声に応じて事務室からとび上つて来たのが佐和山女史だった。やがて別の入口をとおつて四宮理学士が駈けあがつて来た。其他そたの所員たちも多勢駈けつけたが、ミチ子ばかりはどうしたものか却々なかなか影をみせなかった。

3

博士は遂に手当の甲斐かいなく、その儘まま他界した。忌わしい殺人事件が国研の中に突如として起り、しかも白昼はくちゆう、所長の芳川博士が殺害されたというのであるから、帝都ていとは沸きかえるような騒ぎだった。その騒ぎの中に所内に臨時の調室しらべしつが出来、僕たちは片っぱ

しから判事の取調べをうけた。殊に僕は、博士に一番近い場所に居て、しかも博士の異変を最初に発見したというところから、とりわけ厳しい尋問に会わなければならなかった。しかし知らぬことは知らぬというより外に、申し開きようがある筈がない。判事も僕のはげしい態度に眉を顰めはしたが、あの博士の断末魔が聴えた後に、階段を降りて行ったらしい蹙音と扉にぶつかる音をきいたということを非常によろこんだ。そして所員について一々ただしてはみたが誰一人その時刻に階段を降りたというものはなかった。僕は自分にかけられた濃厚な嫌疑に立腹し、どうにかして犯人をつきとめてやりたいものと思ひ、自分だけでは素人探偵になつた気で、所内の皆からいろいろの話を集めてまわつた。第一に四宮理学士が疑われた。

「貴方はあの時図書室から出てどこにいらしたのですか」
僕は訊いた。

「僕はあの二十分も前に、僕の室へかえつていたので。僕さえ図書室にズツと頑張つていたら、いくら僕が弱くてもどうにかお役に立つたろうにと思つてね」と四宮理学士は自分の弱さを慨いたのであつたが、僕にはそれが却て老獪に響いた。

「あの前、貴方は階段の背後でなにをしておいででしたか」と僕は痛い所を追求した。

「いやあれは鳥渡……僕の持薬である丸薬を落したから、拾い集めて居ただけなんです」と答えたが、その答えぶりから言つてそれは明らかに偽りであることが判つた。

その次に僕は佐和山女史に、それとなく話しかけた。

「貴女は、所長が殺された頃、お席にいらつしやいましたか？」

「エエ居ました、ずっと前から……。どうして？」

「おかしいナ」僕はあの殺人の三十分位前と思われる頃に、女史があゝの室に居なかつたことを知つている。「それでは、あの事件のあつたとき階段を誰かが降りて来る蹙音を、お聞きにならなかつたのですか？」

「さア、存じませんね」

「硝子扉がガチャンと言つたでしょう」

「ちつとも気がつきませんでしたよ」

女史は平然と答えた。僕は或いは自分の思いちがいで蹙音をきき扉の鳴るのをきいたのかと思いかえしてもみたが、それにしてはあまりに明らかな記憶だ。階段が一種のリズムをもつて鳴つたことをどうして忘れられようか。

今度はミチ子を尋問した。尋問というと固苦しく響くが、そんな固苦しい態度に出で

なければミチ子と話なんか出来る筈のない僕であった。それは初恋の経験を持たれる読者諸君には、覚えのあることであろうと思う。そのミチ子——愛人ミチ子はあの事件の三十分前には確たしかに図書室に居たが、事件の後一時間ほども所在が不明であった。

「ミチ子さん（こう呼んでもいいかしらと僕は思った）貴女あなたはあの事件のあつた時間、何処どこへいらつしやいました」

「あたし？・どこに居たつていいじゃないの」

と彼女は朗ほがらかだった。

「あれから一時間も貴女は室へやにかえつて来ませんでしたね。どこへ行つていました？」

「ほほ、あたしは別段怪あやしなくなつてよ。鳥渡外ちよつとへ出て木蔭こかげを歩いていただけなのよ。

だけど、古屋さん、貴方自身は所長さんと囊ふくろの中に入つていたようなもので、手を一寸伸ばせば所長さんの頸くびに届くでしょうね」

「馬鹿なことを！」僕は真赤まっかになつてこの小娘を睨にらみ据すえた。「僕は所長になんの恨うらみがあるのです。十日前に入れて貰もらつたばかりじゃありませんか、恩あだこそあれ、仇あだなんか……」

「古屋さん。いまの言葉は、あたしの頭あたまが考え出したわけじゃないのよ。あたしは、或人あるがそう言いつてゐるのを訊きいたのよ」

「誰がそう言ったんです？ 僕は……」

「……」彼女は返事をする代りに、前の大きい机を指した。そのとき事務室の扉がいて佐和山女史のむつりした顔があらわれた。

「ミチ子さん。四宮さんのお呼びよ」

ミチ子が室を出て行くと、僕は佐和山女史に今訊いた話をして女史の反省を求めた。だが女史は「わたくし、そんなことを申した覚えはございません」と簡単に否定した。そしていつになく机をはなれると僕のそばに寄って来て頬と頬とをすりつけんばかりにして、僕の思いがけなかったようなことをしらせてくれた。

「あの日、貴方がきつと見遁みのがしている人があると思いますわ。それはわたくしからは申しあげられませんけれど、ミチ子さんにお聴き遊ばせ、その人はカフス釦ボタンをあの二階のころへ落してしまつたらしいのです。気をつけていらつしやい。ミチ子さんがこれからも幾度となく二階へ探しに行くことでしょうか……」

「そのカフス釦は何時いつなくなつたのですか？」

「それは存じません」

「四宮さんじゃないのですか。四宮さんがなにか二階で探しものをしていたのを見たこと

があるのですがね、尤も事件のあるずっと三十分も前でしたが」

「まあ、四宮さんが二階で、二階のどこです？」

「階段のうしろだったです。貴女の言われるのは四宮さんじゃないのですか？」

「エエ、それは」女史は口籠りながら「やはり申上げられませんか」と答えた。僕は佐和山女史も何か一生懸命に考えているらしいことを感付かぬわけに行かなかつた。女史のむつちりした丸くて白い頸部あたりに、ぎらぎら光る汗のようなものが滲んでいて、化粧料から来るのか、それとも女史の体臭から来るのか、とに角も不思議に甘美を唆る香りが僕の鼻をうったものだから、思わず僕は眩暈を感じて頭へ手をやった。「彼奴がむくむくと心の中に伸びあがってくる。女史も不思議な存在だ。」

僕は扉を押して図書室へ入って行つた。三階へのぼる気はしない。一階の読書机に凭れて鼻の先にねじれ昇る階段を見上げていた。すると二階でコトンコトンと微妙かに音がする。神経過敏になつてゐる僕は、或ることを連想してハツと思つた。何をやっているのだろうか。二階へ直ぐ様昇ろうかと考えたが、僕が行けばやめてしまふにきまつてゐる。僕はいことを思い付いた。それは、一階には手のとどかない高い書棚の本をとるために軽い梯子のあるのを幸い、これを音のすると思われる直下へ掛け、それに昇つて一体何の音で

あるのかを確かめてみようと考えた。僕は静かに椅子から身を起すと抜き足差し足で、その梯子のある階段のうしろへ廻った。がそのとき階段のうしろで、意外なことを発見してしまった。というのは、廊下へ通ずる戸口の蔭に、ミチ子と、それから何ということだろう、友江田先生とが、ピツタリ寄り添って深刻な面持で密談をしていたではないか。

「これは、古屋君」

「先生、えらい事件が起りましたね」

「いまも京町さんと話をして居たことです。ソフトカラーをしているお互いは、ネクタイで締められないように用心が肝要だとナ。ハツハツハツ」先生は洞のような声を出して笑った。ミチ子は僕達のところから飛びのくと、タツタツタツと階段を二階へ登って行ったので僕の計画は見事に破壊せられてしまった。だが先生はミチ子と何の話をしていたのだろう。

こう嫌疑者ばかりが多くては困つてしまう。僕は誰と相談してよいのか、誰を犯人の中からエリミネートしてよいのか判断に迷つた。

僕は徹夜して犯人の研究をしたのであるが結局、疑いはどこまでも疑いとして残つた。

この上はどうしても積極的行動によつて犯人を見出さなければならぬ。その時に不図頭の中に浮び出でたことは、あの図書室の三階には、初めて僕がのぼつて行つたときに直感した通り、何か重大な秘密が隠されているのであるまいか。僕は何の気もなく三階にいつも上つていたのであるが、あそこは犯人と少くとも死んだ所長とが覗つていたのに相違ない。犯人はそれを明らかに他人に悟られることを恐れ、殊更図書室の二階か一階かとなりの事務室かに蟠居して、その秘密を取り出すことを覗つていたのではなからうか。そうだとすると、人知れず三階に登る人間を、ふんづかまえる必要がある。そこで僕は一つカラクリを考えついた。それは三階へのぼる階段の一つへ、階段と同じような色の表紙を持つたスコットランド・ヤードの報告書載せて置こうというのである。若し三階へ昇つた人間があればなにか足跡がのこるであろう。たとえばそれは泥がついていなくとも、リノリウムの脂かなんかがきつと表面に付着するだろう。それを反射光線を使い顕微鏡で

拡大すれば吃度足跡が出るに違いない。僕は科学者らしいこの方法に得意であった。

翌日僕は研究所内が最もだれきつた空気になる午後三時を見計ってソツと三階へ上つた。兼ねて目星をつけて置いた例の本を抜きとると上から三段目の階段へ載せた。何くわぬ顔をして下へ降りて来ると、誰も居ないと思つた二階に四宮理学士が突立っていたので、僕はギクツとした。

「古屋君、君はあの事件で僕を疑っているようだったが、君もあまり立ち入った行動を慎んだがいいですよ」と彼はいつになくニヤニヤと笑つてみせた。

「貴方こそいつも此の室でなにをして居られるのですか」と僕はつい逆腹を立てて言いかえしたが、後で直ぐ後悔した。

「君には言つてもいいんだが、曲馬団の娘なぞと親しくしているようだからうっかりしたことはまだ言えない」

「曲馬団の娘？」僕はなんのことだったかわからなかった。

「曲馬団の娘つて誰のことです。言つてください」

「まあいい。君が冷静であるなら言つてもよいのだが、実は古屋君。所長を殺した犯人はもう解つているのだよ」

「えッ、それは本当ですか？」と僕は思わず四宮理学士につめよった。

「ウン、それが困った人なんだ、実に気の毒でね、だが今夜僕は一切を検事に報告することにしてある。それまでは言えない」

「どうして貴方は、それを探偵されたのです？」

「探偵？」四宮理学士は冷笑した。「探偵するつもりじゃなかったが、あの人殺しの運の尽きさ。実は僕が此の室でやっている実験の中に、犯人の奴がハッキリと足跡を残して行つたのだよ」

「足跡！」僕はいましがた階段に仕掛けて置いたカラクリのことを思つてギクリとした。

四宮理学士は僕を嘲弄する気だろうか？

「こつちへ来給え」彼は案外平然として僕を階段のうしろへ導いた。いよいよ例のあやし
い個所の秘密が曝露するのだ。彼は階段のうしろへ踞むとリリユームをいきなりめくつ
てその下から二本の細い電線をつまみ出した。その電線は床を匍つて一階へ下りる階段の
方へ続いていたが、電線をヒヨイヒヨイとひっぱるとその先のところポタンに小さい鉦のよう
なものが電線と同じようにヒヨイヒヨイと動くのであつた。

「あれは何です？」僕は恐怖にうたれて叫んだ。

「あれは頭微音器けんびおんきさ。小さな音を電流の形にかえるマイクロフォンさ。あれは階段について、階段を人間がのぼるとその振動が伝わって僕の室に在るフィルムへ、電流の波形がうつるのだ。僕は半年も前から、所長だけの了解を得て、『蹺音あしおとに現われる人間の個性』という研究をすすめていたのだ。凡そ人間の蹺音は皆ちがっている。そしてその波形には、その人が決して表面に出さない性質までがありありと映うつることを発見したのだ。実は蹺音と人間の性質の研究は僕の独創ではなく、第十九世紀に英国のアイルランドに住んでいたマリー・ケンシントンという敏感な婦人が驚くべき特殊能力を發揮した詳しい実験報告が出ている。僕はそれをフィルム面にあらわし一層明瞭めいりょうにしたのに過ぎない」

「では、あの事件の犯人の蹺音が撮とれているのですか？」僕は早くそれが知りたかった。

「そうだ。あの時間に一階から二階へのぼって行った一人の人間がある。五分ほどすると同じ人間が二階から一階へ降りて行った。そのあとあの事件発覚はっかく後までは、誰もあの階段をあがらなかつたのだ」

「それは誰です。僕だけに鳥渡ちよつと教えて下さい、お願いします」

と僕は哀願あいがんした。

「それはお断りする」と四宮理学士は冷然と僕の願ねがいをしりぞけた。こうなつては僕のとる

道は一つより外ほかない。身を翻ひるがえして自分の室に帰ると、大急ぎで電話機をとりあげると、研究事務室を呼び出した。あの室では言えないからミチ子をこっちへ呼びよせ、逃とうぼう亡ぼうをすめる心算つもりだった。だがどうしたものだか十秒たつても二十秒過ぎても、誰も出てこない。僕は仕方なく、室を飛び出すと、ミチ子の所しよざい在ざいを知るために、事務室へ出かけた。把ハンド手を廻ルし扉ドアを内側へ押しあげたが、室にはミチ子も佐和山女史も居なかった。それでは図書室であろうと思つて、間あいだの扉を図書室へ開いたその途端とたんであつた。奇妙とも妖艶ようえんともつかない婦人の金切声かなきりごえが頭の上の方から聞えたかと思つと、ドタドタという物凄い音響がして、佐和山女史の大きな身体が逆さかになつて転り落ちて来ると、ズシンという大きな音と共にリノリウムの前に叩きつけられた。僕は茫然ぼうぜんと女史の、あられもない屍体したいの前に立ちつくした。僕はいまだにその妖艶ようえんとも怪奇とも形容に絶する光景を忘れたことがない。僕は敢えてここにその描写を控えなければならぬが、女史が生前つとめて黒い着物を選んでいたのは、女史の豊満な白い肉塊にくかいを更に生かすつもりであつたことと、女史が最後につけていた長襦袢ながじゆばんが驚くべき図柄ずがらの、実に絢爛けんらんを極きわめた色彩のものであつたことを述べて置くに止めたい。

茫然ぼうぜんと突つ立つている僕の側そばを、何処どこに居たのかミチ子が脱兔だつとの如く飛び出して、螺

旋階段を軽業のように飛び上って行ったが、呀あツという間にまた上から飛び降りて来たのであるが、どうしたものか、まるで音がしなかった。それとともに何ヶ月振りかで彼女の白い太股あせについている紫色の痣あざのようなものを見た。それは軽業師かるわざしにして始めてよくする処ところの外のなものでもない。僕は四宮理学士さつきが先刻言さつつた言葉を思い出して、悒鬱ゆううつになった。それにしても四宮氏は二階に居ゐないのかしら。

「四宮さん！」

「……」

「四宮さんは二階に殺ころされていてよ」とミチ子が耳みみの傍そばで囁ささやいた。サテは、と思つて僕がミチ子を見据みすえた時、階上みすで叫こゑぶ声が聞きえた。

「一体どうしたのだ。医師いしやを五六人呼よんでこい。早く早く」

その騒さわぎのうちに僕はミチ子を逃にしてやりたかつた。

「早くおにげ」僕はかすれた声を彼女の耳へ送りこんだ。

「まあ、なにを言いつてるの、貴方あなたこそお逃にげなさい、今のうちに」そう云いつて彼女は袖そでの中から褐かっしよく色の表紙うしろのついた本を僕に手渡たすではないか。それは例れいのカラクリに用もちいたスコットランド・ヤードの報告書ほうごうしょであつた。僕は狐きつねにつままれたようになにがなんだか判わら

らなくなつた。

「なにを勘ちがいしているのだ、僕じゃない」

「隠しても駄目よ。あんた、三階の階段にこの本を置いといたでしょう。リユーマチの佐和山さん、あの本を踏むと滑り落ちたのよ、なにもかも知っているわ、所長のときのこと、四宮さんのこと」

「いやちがう」僕は当惑した。何と言つてミチ子をなだめたものだろうかと眼の前に立つミチ子の肩をつかまえようとしたときに、佐和山女士墜落の音をききつけた所員が方々からドヤドヤと駈けつけた。僕は、もう力もなにもぬけちまつて

「二階を、二階を！」

と指して所員の応援を求めた。

二三人の所員がかけあがる。

と予期したとおり大きな喚声が二階にあがった。

「四宮さんがネクタイで絞殺されている！」

「なに、四宮君が……」

彼女こそ、やったのではあるまいかと、その顔を見詰めた。睫毛の美しいミチ子の大き

な両眼に、透明な液体がスウと浮んで来た。ふるえた声でミチ子が言った。

「……だから、あたし、貴方のために、殺人の証拠になる此の本を取って来てあげたのよ」

5

佐和山女史の懐中からは、四宮理学士の撮った蹻音あしおとの曲線をうつした写真が出た。それは多分、三階のどこかに学士が危険を慮おもんばかつて、秘ひそかに隠匿いんとくして置いたものであろう。それには明らかに、所長殺害事件のあの時刻に佐和山女史の一種特別な蹻音きようおん波形はけいが印いんせられていたのであった。女史は、女理学士認定の蔭に所長となにか忌いまわしい関係を結んだものらしくその情痴じょうちの果に絞殺事件が発生したと伝えられる。四宮理学士の絞殺も同一手段で行われたのであったが、学士が女史の犯跡はんせきを握っていたので、己やむを得えず殺害したものらしい。女史が僕にきかせた釦ボタンの話は、未いまだに解らないが、あの顕微音器のことを、マイクロフォンボタンというから、何かその辺のことをもじって事件の混乱を計画し

たものであらうと思われる。

友江田先生とミチ子との関係は異母の兄妹であることが判った。妹のミチ子はその父の変質をうけ継ぎ、小さい頃から自らすすんで曲馬団の中に買われて日本全国を漂泊していたのを、友江田先生がヤツとすかして連れもどり、タイピスト学校に入れたりしてやつと一人前の女にし、国研へ就業させたものであるが、決して兄妹とも知合であるとも他人に知られてはならないという約束であった。

だがこれを知ったのは、僕たち二人が友愛結婚をしてしまったあとの話である。

僕たち同士の變質は（それは亡くなつた四宮理学士にはよく判つていたのだろう、恥かしいことだ）もう一日でも別れ別れになることは出来なくなっているのだ。そうだ。今日もこれから家へ帰つたならあの特壹号の革鞭で、ミチ子の真白い背中が血だらけになる迄ひつぱたいてやらうと思う。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1930（昭和5）年10月号

入力：田浦亜矢子

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

階段

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>